

[制作記録]

「重なりもしくは繋がり」2015 in 鶴林寺

“Repetition or Connection” 2015 in Kakurin-ji

池田晶一

IKEDA Shoichi



写真1 「重なりもしくは繋がり」

1. はじめに

本作品「重なりもしくは繋がり」は、『「アート・プログラム in 鶴林寺 vol.3 ～施美時間～」 平和への祈り』の為に制作したものである。

本展はGALERIA PUNTOによる企画で、2015年10月10日(土)～10月24日(土)に鶴林寺(兵庫県加古川市)

で開催された。

アート・プログラム in 鶴林寺～施美時間～は、鶴林寺において隔年で開催されている展覧会で、この回で3回目となる。

今回の展覧会では、平和への祈りがテーマとされ、赤を基調とした展覧会とされた。

企画内容に合わせて、展示場所の設定や展示作品



図1 展覧会のチラシ

の方針などを詰め、制作、展覧会へと挑んだ。

2. 環境芸術について

私は予てより自身の作品を、環境芸術を背景として制作している。

環境芸術という言葉は様々な場で語られ、多様な意味の元で使われる。ここで私が環境芸術に対して、どのように向き合っているか、またその考え方を述べておく。

私が自身の作品をどこかの場所に設置する時には、その場所の意味や、作品を配置した時にそこに生じる新たな意味を考えることから始める。

空間の中での造形的な有り様や、もともとその場の持っている意味、そしてそこに集う人達の特性等を頭に思い描きながら、作品のイメージを描いてゆく。

作品は単体で存在するのではなく、作品と作品を取り巻く全てのものが、どのように関わりを持って新しい空間ができるかということに、私は意識を注ぐ。

特に、空間の造形的な視点、周辺の建物や様々なものとの関わりの中で、もともとそこにその作品や造形があったかの様に作品のイメージを作ってゆく。

仮設のものであっても、その場所の為に作られた様な必然性を求めて、自身の作品をイメージする。作品が空間の中で、周辺のものや響き合い相互に作用し存在することを意図している。

3. 制作のコンセプト

今回の作品のコンセプトであるが、展覧会自体に平和への祈りというテーマが設定されており、赤を基調にしたものということも指示されていた。

まず、作品の展示場所であるが、鶴林寺境内にある常行堂（写真2）の縁側とした。

常行堂は、阿弥陀如来を本尊として常行三昧の修行をする場とされる。宗教儀式にとって、特別な場所である。また、鶴林寺常行堂は重要文化財に指定され、平安時代（12世紀前半）に建立された歴史的にも貴重な建物となっている。



写真2 鶴林寺 常行堂（重要文化財）

この修行が行われた建物という意味に対して、私自身は「重なる」「繋がる」という意味を、造形的に同じ形を繰り返して構成することで、そこに見える形で加えることとした。

今回の展覧会全体の「平和への祈り」、または願いを、繰り返す形の中に込めた。

また、作品は12個の繰り返す形で構成したが、12という数字は時間や方角を示すためにも用いられる。それらを想起させるものとして用いた。

そして直線上に構成した配置に関しては、こちら側と向こう側を意識させる。赤い色に関しては、赤は愛や情熱などを意味する一方、危険を象徴する色としてもとらえた。

赤い直線を一線上に構成する事で、そこに物理的

な境界を構成した。その意味は、現在の社会における様々な出来事に対して、一線を超えてはならない何モノかに対する私の想いを作品に込める事である。例えば、戦争や原子力に伴う放射能の問題など、踏み留まって欲しい様々な事象がそこにある。

4. 作品の制作

作品は、陶磁素材による造形である。

石膏型を用いて、泥漿鑄込みにより制作した。

形状は円弧状の形態2種で構成される。

今回、新しい試みとして、ピンク マット釉を施し、1230度で酸化焼成した後、作品の光沢部分は楽焼釉薬 無鉛 ピンクの低下度釉を施し、二度焼きしたものである。

楽焼釉薬 無鉛 ピンクの下地は釉薬などを施さず素地のままで、締め焼きの状態である。

陶磁器による赤系の色の発色は難しいものがあり、ピンク マット釉は、濃いピンクの顔料によって発色を得ている。作品の視覚効果の上で、マットな表面と光沢のあるガラス系の深みのある赤系の色を用いたかった為、二種類の釉薬を用いた。また、低温釉薬を施し二度焼きすることで、作品全体に釉薬を施すことが出来る利点がある。

寸法：2個の形状、各W:585×d:175×h:120mm

素地：半磁器

成形方法：石膏型による排泥鑄込み

釉薬、焼成：

ピンク マット釉（ヤマダ窯業原料原料製）

1230度（酸化焼成）

楽焼釉薬 無鉛 ピンク 800度

5. 終わりに

「アート・プログラムin鶴林寺 vol.3～施美時間～」に参加出品させて頂き、初回から続けて3回目の出品となった。

鶴林寺という場所柄、毎回そこに生じる意味を考

える。自身の中にある問題意識と、その時に起こっている様々な社会との関係の中で、作るべき作品のイメージが膨らむ。

また、最初に述べたが、作品とそれを取り巻く周辺の有り様は、互いに関係し響きあう。インスタレーション、もしくはその場に後付けであるが、コラボレーションさせてもらっているという感覚が強い。

今回の作品では、展示場所とした常行堂の建物とのコラボレーション。作品そのものだけではなく、常行堂も含めて作品として見せることである。

そもそも、そこには意図されていなかったものを配置し展示する。その場に違和感を作り出すことだけではなく、そこにあった過去の様々な歴史、現在も繋がる様々な意味に敬意を持ち、作品を意図したい。

同じ鶴林寺における展覧会でも、毎回そこに見出す意味は、私にとって違うものが現れ、継続的にこのプログラムに関われることは、貴重な体験で有難いことである。

展覧会の企画者であるGaleria Puntoには、感謝を致すところである。また、展覧会の運営にかかり、アート・プログラム実行委員会の方々にも感謝致す。この場を借り御礼申し上げる。

●展覧会データ

展覧会名称：「アート・プログラムin鶴林寺vol.3～施美時間～」 平和への祈り

会期：2015年10月10日(土)～10月24日(土)

場所：鶴林寺（兵庫県加古川市）

企画：Galeria Punto 藪多間

運営：アート・プログラム実行委員会

●画像出典

図1：Galeria Punto 現代アートギャラリー

<http://i-harima.net/galeria-punto/art-program-2/> (2016.11.6)

(いけだ・しょういち 工芸／陶磁)



写真3 「重なりもしくは繋がり」



写真4 「重なりもしくは繋がり」



写真5 「重なりもしくは繋がり」